

東方文化研究所と狩野博士

昭和二十二年十二月十日、緊急の用事で東京に行かねばならぬことになつたので、その前日に當る九日の午後、狩野老博士邸を訪ひ、玄關先きで令夫人から御容態を聞いたところ、格別どこが悪いというのではないから、食欲さへ増進すれば漸次回復せられるであらうとの診断であるとのことに、急逼の容態などとは思ひもそめず、態とお目にもかゝらないで引取つた。それが十四日に歸宅してみると、前日既に永久の眠に就かれた後で、あまりのこと言葉も出でず、たゞ悵然として悲嘆にくれるばかりであつた。それから早くも四十餘日、東方文化研究所設立當時に於ける博士の思出を書くやうにとの注文を受けて、今宵寒夜の薄暗い電燈の下に筆を執つてみれば、それからそれへ追懷の緒は綿々として盡きぬ。

北京に於ける文化事業總委員會の活動の停頓につれて、その前からも屢々議に上つた國內に於ける同種の事業の計畫が、漸く具體的の動きを示すやうになつたのが、昭和三年の春も末頃からであつたかと思ふ。同會の日本側委員の一人として盡力せられた狩野博士が、在京都の有志者を代表して、東京の有志と共に、時の外務省對支文化事業部との間に折衝を重ねられ、最初に着手することになつたのが經籍史籍の索引の編纂で、この年十月からこの事業を開始したのであつた。昭和三年といへば、實に博士が華甲の壽を迎へられた年で、その二月十一日には同友門